

カルテの余白

なだいなだ



カルテの余白

なだいなだ

毎日新聞社



カルテの余白^{よはく}

定価 八八〇円

昭和五二年七月二十日 第一刷
昭和五九年八月二五日 第十一刷

著者 なだいなだ

編集人 川合多喜夫

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島

〒八三三 北九州市小倉北区紺屋町

〒四六〇 名古屋市中村区名駅

印刷 東京ベル印刷
製本 大口製本

カルテの余白 目次

I

デンワノイローゼ 11

精神の系統発生 15

てんかん性不機嫌にあらず 19

情報時代か、断絶時代か 22

アル中治療作戦要務令 25

大学で医の倫理が教えられるか 29

三 悪 32

情報と防衛反応 35

ことなかれ主義という病氣 38

単純にびっくりしたいもの 42

患者同窓会 45

ドクター・ピックスー 48

えらい、とはなんだろう 51

ついに追い越された 55

自分のことはあえて棚に上げる 58

家族もつらい 62

狼が来る 65

コツズイセンシ 69

うつ病ばやり 72

年齢は何ではかればよいか 75

おおらかなことこそいいことだ 79

やらすぶったくり 82

流れものの患者 85

ある良心的な男性 89

正しいか、間違っているか 92

女の復讐 95

世の中、悪くなるにきまつてゐる 99

あやまれ、あやまりなさい 103

ちくしょう、うまくやってやがる 106

どういうわけか 110

笑う医者 114

患者の家族 117

家内に教わったなくしもの発見術 121

逃げだしたい 124

四十四歳、わかる男 128

家庭の事情 131

ゆうれいの話 134

変な死に方 138

II

ぼくは信じぬぞ 145

プロフェッサーと呼ばれた 148

医者でもわからんこと 152

あやしげなる人間像 156

健康強迫神経症 159

「うつ病にする会」 163

くもの巢亭 166

人間が犬なみでなくなった不幸 170

なんだか、へんだ 173

無学文盲です。信じて下さい 177

十八歳以上おことわり 180

おしゃべりの国 184

いやらしき中年 187

会議ばやり 191

変な病氣にかかったぞ 194

若い女たちの食欲をなくさせろ 198

キツネつきをさがしたが… 201

オシエロコジキたち 205

ほめる 208

電話魔のおばさん 212

無責任なことをいうな 216

とばかり 219

三、二、一、ゼロ、発射 223

悲しい顔と楽しい顔 226

いつもニコニコ日本人 230

夢の中の夢 234

毛沢山君のこと 237

あとがき 241

カルテの余白

I



☆デンワノイローゼ

患者の話ではない。ぼくのことなのだ。精神科医のぼくである、最近デンワノイローゼなのだ。電話がこわい。リリーンとベルが鳴るとギクリとする。心臓がとまりそうな気がする。スランプで筆が進まず、さいそくの電話がかかるのを恐れたことがはじまりである。さいそくの電話がもうかかって来る、もうかかって来る、そう思いながら書き終らない原稿を眺めている。先の文章がどうしても出て来ない段落を見つめていると、昔習った数学の不連続などという言葉が、思い出その顔が目の前にちらつく。ところが、別の人からの電話だ。

「この間は、わざわざ講演においでいただきました」

「はあ」

「ありがとうございました」

「はあ、それで」

「ただ、それだけでございます」

「はあ」

「面白くて、有益なお話だったと、一同喜んでおります」

「はあ」

「そのことを、一言、お礼申し上げたくて」

ていねいな人だ。礼儀正しい人だ。だが、その礼儀正しさがうらめしくなってきた。受話器を置いて、もう一度原稿用紙とにらめっこすると、一字も書かないうちにまた電話だ。

今度こそさいそくの電話だぞ、と思う。

「××出版社ですが」

「まだ、できてません」

「もしもし」

「ダメなんです。かんべんして下さい。あと一日待って」

「もしもし、おかしいな。これから原稿をおたのみしようと」

「おかしいな。××出版でしょ」

「そうです」

「あの、〇〇っていう雑誌の原稿でしょ」

「あれ、〇〇で、何か」

「そうなんです」

「でも、こちらは同じ社でも、別の雑誌なんですよ」

「そうですか」

ぼくはそこでガックリする。何でまた、一つの出版社で幾つもの雑誌など出すのだ。事情を説明してかんべんしてもらって、また席にもどる。そして、今まで書いて来たところを読み直す。ペンをとりあげようとすると、リリーンだ。今度は作家の友人からだ。

「おい、なだか」

「そうです」

「おれが、わかるか」

「わかる、わかる」

「それなら、ダレだ。言ってみろ」

「わかってるんだ。用件を言ってくれ」

「お前、何でそうセカセカするんだ。ああ、そうか、お前、今、奥さんと、フフフ」

「ちがうよ、ちがう」

「じゃ、風呂に入ろうと思ってハダカになったところか。今、身に何をつけている。パンツか。お前はハダカになる時、上から先に脱ぐのか、下から先か」

「ちがうんだ。風呂は三日も入っていない」

「それは、いかんぞ。おれは風呂だけは毎日」

「それで、何だい」

「じゃ、少しは話していいんだな」

ここまで来るのが、なんと長く感じられることだろう。

「じゃ、話すぞ」

「なんだい」

「おれは、今、酒をのんだところだ」

「そうらしいな」

「わかるか」

「わかるよ」

酒の匂いなど、電話線をちゃんと伝わってくるものなのだ。

「それで、ちょっと機嫌がいい」

「よさそうだ」

「それで、ふとお前と話したくなった。用件でもない、特別な」

ばくはガツクリと安楽椅子に腰をしずめる。